

晴らしき須走を知りたい!  
「すばらしい隊」養成講座 第6回講座概要

## 第1部：体験 須走五合目を堪能する

■日時：令和元年10月26日（土）9時～12時

■場所：須走五合目

■講師：東富士山荘 米山千晴氏

### ■散策前説明

- －水ヶ塚に樹齢400年のブナがある。宝永の噴火で燃えなかった巨木群である。
- －明治43年7月に須走在住、渡辺キュウサク氏が出した地図には山頂は小山町になっている。この事実を資料として知ってほしい。現在の地図と違う。昔の方々が調査したものを大事にしたい。
- －昨日は気温が6℃、夕方が4.7℃でした。今朝は5時前で11℃ある。
- －これから歩く所は動物たちの生息する自然の世界。我々がそこに入り学ばせていただくという感謝の気持ちを持つことが大切である。大勢の人がいれば大丈夫だが、標高1,300メートル付近は熊の生息地である。
- －約2時間半の散策、飲み物を用意する。ここの気圧は801.7ヘクトパスカル。平地は1,020程度で200くらい気圧が低い。完全に鼻から吸って口から吐く腹式呼吸でないと息があがる。今日は一番後ろにガイドの山本がフォローする。小富士までは引き換えせるが、それより先に行くと戻れず、馬返しまで下りるしかない。
- －ここから江ノ島、相模湾、その向こうが三浦半島、東京湾が中に入って奥が房総半島、そしてランドマークタワーが見える。右に振って箱根の山々、そして大島が見える。ちょうど右の方向に見えるのが天城連山、手前が愛鷹山、愛鷹山の向こうが沼津で駿河湾がある。

出発し遊歩道に向かう

### ■ナナカマド

－今年台風が多く、風が強かったためほとんど実がついていない。今の時期はアミグダリンという毒の成分があるので鳥も食べない。霜が降りる頃から約3～4ヶ月で毒の成分が無くなると鳥が食べるようになる。鳥が食べて高所、中腹等に糞をまいて森林は形成される。



### ■オオカメノキ

－紅葉が見頃の時期だが、台風15号・19号、その後の乾燥した風により葉が落ちてしまった。  
－ガマズミ科で若干大きい黄色と赤の葉である。大きい水がめの形をしている葉なので昔からこう呼ばれている。別名は「ムシカリ」。  
この葉を虫が好んで食べる、虫が狩る。



### ■ハルマキ

－実は小豆より一回り大きく小指の爪ぐらい、非常に甘みがあり、おいしい。今年は実付きが非常に悪い。すべての木に実がついていない。動物が食料がないからででてくる。

## ■フジアザミ

—辛うじて花がついている。上に痛そうなとげがあるのは自主防衛本能で動物に食べられないため。もうじき種がつくと実が枯れ始めるとヤマガラやシジュウカラの仲間、コガラ、ヒガラ等が飛びながら種を食べる。とげがあるうちは食べられない。



## ■カニコウモリ

—葉がカニの甲羅の形をしており、実がついている。

## ■シラビソの林

—ダケカンバ(カバノキ科カバノキ属の落葉広葉樹)カラマツの木が多かった。要するに今から 310 年前の宝永噴火で消滅している所から少しずつ原生に戻っている。



—最初は先駆植物のカラマツ、そして富士ザクラ、ダケカンバ、ここはシラビソの林である。おそらく 70~80 年くらい前にはカラマツが生えていた。ということで極相林(注 2)になりつつある。



## ■林に入る

—林に入ると地衣類になる。陽が一日中差し込まない極相林に苔が繁殖する。極相林でない広葉樹林のところは下草。覚えるポイント。

—倒木が多い。平成 30 年 9 月の台風の風はおそらく 40 メートル以上あった。極相林の倒木は林に穴をあけ、陽が差し込み、実生(ミショウ)、モミが育つ。シラビソの木が成長していくことになる。

—これを見てください。これはイチヤクソウ。シロバナのイチヤクソウ。ベニバナのイチヤクソウではない。これも苔むしたところでは成長する。

—雨で濡れるところは滑るので、根には乗らないようにする。この歩道は木道にする予定。土の所は検討中。数万人が歩くので上げた方がいい。(靴の裏を指して)こういうものにくっついて運ばれてしまうので。

## ■昭和天皇が登られた須走登山道

—須走浅間神社から続く旧登山道は、明治 34 年、昭和天皇が利用し富士山頂まで登られた。下りは御殿場口。馬返から山頂までの登山道は当時、7,000 万、今の金額で 5-6 億円のすごい金額で整備した。石積みなど所々に残っており、これは財産である。強風が吹いたら隠れる場所や馬が休む場所が今でも残っている。須走の文化遺産である。

—この登山道では 7 月 1 日にお山開き、8/31 にお山仕舞いをやっている。

—この開いている場所の木々は昨年の台風で絡み合いながら倒れた。7 月に林野庁や森林管理事務所から許可が出て切った。絡み合ったので枯れており、おそらくこの冬に倒れる。一カ所空間が開くと陽が差し込み、木々は生活しにくい環境となる。それが強風で倒れる速度をあげていく。

—酒匂川の源頭(水源)。7 合目あたりから沢が酒匂川となる。毎年形状が変わる。昨年の 3 月の大雪崩によりこうなった。下は溶岩がむき出しで、おそらく時速 170 km を超す勢いで 2,600m から 750 m まで流れた大災害だった。演習場だったので公にされていない。42 万 m<sup>3</sup>の土砂が演習場に流れ着いた。この辺は川幅が狭いので流れがここまできている。(沢の上で) ここまで土砂が上がっている。

—木が痛みから瞬間の速度はすごいものであった。(枯れ枝などの塊を指して)これは上から流れてき

たと思う。地球温暖化で富士山は凍ってなく、非常に崩れやすくなっている。

- この滝より上に滝があり「水場」という。古御獄神社の社殿から約1町歩3千㎡の土地が社有地で、この水場で汲んだ水を社殿に上げたといわれている。この川の左岸が行場で、A、B、C、Dの4ヵ所が富士山信仰の行者が修行行場として見つかっている。扶桑教や丸山教ではないかと調査している。ここ1年くらいでわかると思う。室町後期の湯飲み「くらわんか」が発見され、施設または行場があった事が裏付けられた。これ以上は文化庁が発掘調査を認めていない。掘ればお宝がでてくると思う。このままにしておくで沢がえぐれ、溶岩が固いので横に広がるなど地形が変わる。あと1,2回で大きいのが来ればこの小さい沢が7~8mなる。
- 小富士より下る。ここは1,200年前の溶岩で7合目の見晴館あたりから流れている。浸食が早いとかなり吹き込むでしょ。そうするとどこかで洗掘されてくと溶岩を飛ばしながらいく。洗堀型火山泥流というもので今、馬返しの工事の他7機ある。
- 落ちていた白い葉はウラジロの木である。冬場には白く、雪が降ったような感じになります。見てください。これが小さい沢でも去年の雪崩でこうなる。
- 森林形態が違うのがわかりますか。極相林の中にマツ科のコメツガがある。シラビソの木もある。最初に照葉樹林、先駆植物のカラマツ、そしてダケカンバ、そういう林からシラビソの林、シラビソから最終的にはコメツガの林になる。コメツガの林が原生林を形成している。

#### ■包丁で割ったような森林形態

- (ふもとの方向を見て) 広葉樹の林がある。310年前の宝永噴火でこの先が消滅したが、ここは残っている。その沢は青山学院大学の教授の話によると110年前に大雪崩で大体120mの幅で林が消滅し沢になっている。それらを踏まえ原生に向かっている林。こちら極相林から原生林になる林で林(の種類)が違う境である。このように包丁で割ったような所は他にない。
- 垂直分布で縦の樹木の移りようはあるが、同じ標高で真横に切られているのではない。110年前の噴火が影響してこちらは壊滅状態、こちらは残ったということだ。
- この溶岩は先ほどの溶岩とは違う。3,700年前の溶岩なので劣化している。去年見せた溶岩棚と同じである。表面の部分はなだらかで段々劣化している。これは仕方ない。
- この溶岩は富士山山頂から流れた溶岩である。山頂火口からの噴火は有史以来18回しかない。あとは中腹から噴火する側火山である。ここで止まっているのは、前の世代の富士山である小富士に邪魔されたからである。小富士は古い富士山です。
- 溶岩の上に大きなコメツガの木が生育している。大きい根から小さい根まで出している。倒れないように溶岩の割れ目に根を入れて生きている。今回、木道の予算付いた。来年の春先以降、測量に入る。自然環境の厳しい中で木々たちは固い溶岩の上に生きている。
- ここに広場がある。山中湖登山道がり、小富士のピークがある。その左の脇を籠坂峠からずっと登っている。東富士山荘から約30分登ったところに古宿があり、そこまでが山中湖道である。私が子どもの頃は登って来る人がかなりいた。ここに山中湖村が山小屋を建てる計画を静岡県と争った。元々ここは静岡県だとして小屋を建てさせなかった。赤い杭は山中湖村が世界遺産になる時に登山道の拠点だとして建てた。この下は県境がない。小富士は小山町須走のものであるが、今の地図ではここに県争にならないようにここには県境がない。

## ■小富士

- ー1997mが小富士の山頂。右手が八ヶ岳。天気がよければ左奥に白馬岳が見える。そして右に振ると奥秩父の山々。河口湖、河口湖大橋が見える。また右に振ると山の上に白いものがあるのが三つ峠。三つ峠の下が富士吉田、その下に白い線は中央高速。
- ーまっすぐな道の先は富士浅間神社北口本宮で門前町の形態で両側に御師の家等が並んでいる。北の金の大鳥居から富士山頂まで一直線。須走浅間神社も富士山を遥拝するためにまっすぐである。これが山岳宗教、富士山を崇拝するために作った門前町である。
- ー右手に忍野、昔は明見(アスミ)湖といった。黄色建物はファナック(FANUC)、山中湖。奥に街並みは八王子でむこうが高尾山である。右手には島が頭だけ見える。手前は海。この風景は須走の財産である。(富士山頂を見ながら)こうやって見ると溶岩流が流れたところがよくわかる。大概あの辺から溶岩流が流れている。側火山である。須走の登山道の8合目の小屋。雪をいただくと溶岩流が流れた跡がよくわかる。さきほどの溶岩もここの溶岩もあそこから流れ出たものです。そしてあれから右に振るとジグザグの道は昭和六十何年に大崩落で20人亡くなった吉田大沢の事故、あれから吉田口の下山道の付け替えをした。ジグザグは37つある。
- ー段々湿気があり、霧がでてきた。次の行程に入る。カラマツの紅葉がきれいである。

## ■祠のまわりで

- ーこれは扶桑教から分かれた丸山教が設置した。色々な分派がある。数年前の台風で倒れた際、間違えて向きが逆さである。正面が大日で、本当は向こう(東)を向かなければならない。石仏が4体あったが誰かが持ち去った。明治の廃仏毀釈により、古御嶽神社も神と仏を分けなければならなかった。あそこも社殿があり、仁王様は全部首を切られた。富士山の山頂にあるコノシレーゼ?も横にあるのも全部切られた。吉田口では、白山岳の向こう側に仏石流し川があり、そこに投げ捨てたと言われている。

## ■林の入口

- ー本格的に下山を開始する。紅葉が見頃で、あの上(富士山の方向5合目辺り?)に赤が点在しているのはナナカマドである。
- ー(林の入口で)コケモモにほとんど実がついてない。実付きが悪い。通常なら食べられる実がある。

## ■林の中

- ーキヌメリガサは黄色いなめこで、食べられる。
- ー今年の台風の風倒は(倒れた木を指して)シラビソばかり。木に凍裂があり、風が吹くと裂けて倒れる。厳冬期の富士山は標高が2000m位で気温はマイナス25℃。凍ったところが裂けた木はほとんど倒れる。コメツガの木は凍裂しないから倒れない。
- ー昨日の雨で水分が多いので、午後から霧が出る。1日中晴れるということがない。

## ■地図上の小富士

- ー下から見える地図上表記されている小富士はここで、その三等三角点が1,904mである。5合目から歩くハイキングコースの小富士は1,979m。小富士はこんもりしており、去年の酒匂川原泉である。まぼろしの滝は分水嶺で狩野川に流れる。ここは相模湾に流れる。
- ーあそこは大涌谷。ランドマークタワーができた時は異様なものができたと思った。ランドマークタワーの左が大山で丹沢の山々である。

## ■ここからダウンヒル

- －歩き方は前傾でなく、後ろへ体重をかけて、踵から下りると転びにくい。この三等三角点は小富士のピークで地図上のピーク。そちらの赤いのが防衛省。演習場の位置を示している。御殿場口駐車場の右、2か所の山は双子山。上双子が約1970mでここより少し高い。下双子、鳥居がある。双子山、アカツカ？がある。その先には大島。富士火山帯が1列だということがよくわかる。
- －大室山まで一直線上で噴火するならこの線上である。御殿場の駐車場の手前に約20町歩の小山町の飛び地がある。防衛省に貸して年間3億円交付金がある。役場の職員も場所は知らないと思う。
- －演習場の全体の補助金は御殿場と合わせて42億くらい。色々加算し170～250億円位。あのグリーンは町の小山佐野川調整地。去年の土砂が流れた則川調整池は工事をしている。あそこから広がった。あの真ん中にある鉄塔線は佐久間ダムからの電気が送られている。湯船つばらへ持ってくる。左側にある建物が自衛隊の市街地戦闘訓練所。全国から集まり市街地戦闘の演習をしている。
- －昨年にはなかった筋はバイクの轍跡が侵食されている。本来あそこから入る予定だったが深すぎて渡れなくなった。ダウンヒルの醍醐味を味わってほしいが、禁止のバイクも乗り入れてくる。このような侵食を「ガリイ」と呼ぶが、ひどくなると溪谷となる。
- －先駆植物は雨、風、雪で言うように育つ。ところがまわりに森林が近づくようになると上に向かって生える。風衝樹形から上を向いてくる。(56:23)
- －今から8年前、小山町を徹底的に知るため、GPSで地図上の県境を調べた。ここが県境である。あれが彰徳さんの林でこちらが山梨県の共有地の林。真ん中約200m間はお互い干渉地帯で自然が残っている。1本線は山梨県こちらが静岡県で、ここから山頂に向けて県境がある。
- －みなさんに絶対守ってほしい場所へ行く。数年前までは渡れたが現在ミニグランドキャニオンみたいになり、どんどん深くなっている。本来は裾から来られたが、豪雨による浸食でいけない。
- －イネ科の植物は繁殖が早い。集まると先駆植物のカラマツが根付く。ここらは色々なマメ科の植物が生育するので樹木が大きい。樹木が大きくなるとダケカンバ等が進出し、森を形成していく。ここまで約300年はかかっている。森になるにはあと100年～200年はかかる。これが富士山の火山高原における植生の回復である。
- －富士アザミが切られているのは鹿が食べた。とげがあっても平気で鹿は食べる。
- －ミニグランドキャニオンは富士山の歴史がよくわかる。ミニグランドキャニオンの元凶はオートバイの轍に水が流れてこうなる。(地層を見て)数千年前の地層ですね。今1500mくらい。(1:07)
- －スキー場跡。ワイヤーリフトで三角点まで引っ張って登り、スキーをした。国体も行い、このすぐ下までバスが来ていた。昭和39年頃には廃止になった。

## ■林の中に入る(1:12)

- －サルナシは実が小豆よりひと回り大きい小指の爪くらいの大きさで、非常に甘みがあるおいしい実。今年は春先から実付きが非常に悪い。
- －ここからは原生林というか混交林。ここのダケカンバは300年以上経っており、これだけ大きいのではない。ここから下は巨木地帯に入る。これは推定樹齢400年のミズナラの木です。宝永の噴火でも焼失しなかった。(近くの木を指して)これは300年位。小山町の財産である。10数年前に折れた枝があんなに太い。宝永噴火の影響はあったが頑張った。(みんなで手を繋いで木の太さを測る)5人、8mはあるね。(全員で写真を撮る)(1:20)
- －これはモミの木。モミの木は棺桶に使っていた。柔らかくて切り出しやすいのでほとんど切られて

- いる。自然林で巨木が残っているのはあまりない。西臼塚にある。ここは標高 1500m でまだブナはない。あと 300m 下るとブナ林が始まる。植林し薪炭材としていた。(1:25)
- しばらく巨木が続く。(倒れた木を指して) 寒いので朽ちるのに時間がかかる。中は空洞。途中から横枝になる。なぜかという、江戸の後期、明治の始めに地域の人が薪材として木を切っていた。その木が伸びて太くなり、横から枝が出た。昔は生業として木を切っていた。この辺りのミズナラの木は途中から枝が出ている。太い木を切らず、おそらくこのくらいの時に切った。(1:27)
  - 絶滅危惧種の山芍薬の種。この辺りが山芍薬の群生地。人が入ると持っていかれる。山芍薬は花が咲くまで3ヶ月、花が咲いたら3日しか持たない。
  - その二つに分かれているのが栂(ツガ)の木。栂の木も中々ない。
  - サルスベリの木。この辺りのミズナラも途中で枝分かれ。そのキノコはヌキタケ、ホコリタケは鹿も食べる美味しい。
  - この辺から植生が変わる。今まではミズナラが多かったがブナが始まる。(大きな木々を指して) 巨木3兄弟です。ミズナラ、ブナ、モミです。(キノコを指して) これがぶなしめじの原種、食べられる。マスタケは若いなら食べられるがこれは無理。ブナの木があるとマイタケがある。
  - 見せたい場所が沢山あるなかごく一部。御殿場市境の状態、途中の溪谷など知っておいた方がいい。310年前の宝永噴火で木が燃え尽くされて炭ができている場所もある。それをみてもいいと思う。これだけの巨木原生林が残っていることがすごいこと。ガイド、案内が必要な所である。
  - ここで沢を渡る。沢が段々深くなっているので気をつける。
  - 足や膝の痛みは運動不足。1日に12,000歩、歩けば元気になる。私は70歳だが、歩かないと膝が痛くなる。今日は8,200歩。ゴールでは1万歩程度。長生したいならば動く、毎日、炬燵にはいつてテレビを見ていたら早死だ。大自然の中で力、英気を頂く。
  - 今から沢を渡る。(辺りの木を見て)モミを植林した人工林、あちらは原生林で比較対象ができる。ホップみたいな実はイヌシデ、シデの木。この標高になるとイヌシデ落葉広葉樹になる。
  - 植林をした時の馬力が入った道が残る。昭和30年代に熊の牧場を作ったが資金不足で頓挫した。
  - 先ほどの林と違う。植林しても間伐をしないと災害に弱い林地になる。荒れ放題の山がこれから増えていく。夏の2か月間の登山シーズン以外は何もない。薪を切っていた時は現地で寝泊まりし、馬力だった。今はボンネット型の小型の四輪駆動車が入るようになった。
  - あと100m程度で馬返。標高2,000mから1,350mまで下りた。

## ■馬返しに着いて

- 2,600mから土砂でここの舗装が埋まった。建設中の砂防ダムは景観上、良くないが仕方がない。今後、ダムに溜まった土砂を出す事を考えないとならない。
- ケガがないか確認。富士山の横の林の上に三等三角点が見える地図上の小富士から歩いてきた。怪我なく無事に下りてきたこと感謝申し上げる。

注1 先駆 さきがけ。行列などの前方を先導すること

注2 極相林 森林の樹木群衆がほとんど蔭樹で構成されるようになり、それ以降樹種の構成がさほど変化しない状態になったことを「極相に達した」といい、極相に達した森林を極相林という

注3 洗堀 水の流れや波の影響により河岸、河床の土砂が洗い流される